2018
12
No. 674

國學院大學学報

国学院大学
平成30年12月10日(月)　定期号(毎月10日発行)　1部20円
[発行]国学院大学　[編集]総合企画部広報課　〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目　[電話]03(5466)0130　[FAX]03(5466)0528

「冬木」
桑畠の霜荒れ土に　晝日照り、
まねく乾きて、
とほき　もの音
（「水の上」）
釈　迢空

祭　儀　■ **天長祭**　12月23日(祝・日)　午前11時　神殿　■ **大祓**　12月26日(水)　午後4時　神殿前庭　■ **歳旦祭**　1月1日(祝・火)　午前11時　神殿

ゼロから学んでおきたい 民俗学

11月、国連教育科学文化機関（ユネスコ）政府間委員会は、「男鹿のナマハゲ」（秋田）や「甑島のトシドン」（鹿児島）など8県10件の行事で構成する「来訪神　仮面・仮装の神々」を無形文化遺産に登録すると決定。日本各地の民俗伝承に国内外の注目が集まっている。

新年を迎える行事や習わしもまた、民俗が伝承され、変遷してきた経緯がある。

国学の流れをくむ国学院大学は、「新国学」とも称された民俗学の講座を日本で初めて開き、研究は今も盛んに行われている。

「日本民俗学の祖」と仰がれる柳田國男、そして柳田の高弟として民俗学の基礎を築いた折口信夫。二人は本学で教壇に立ち、「伝承」と「変遷」を刻んできている歴史世界を明らかにする、民俗学の研究を深めた。文学部の新谷尚紀教授は「柳田、折口の民俗学は歴史学や考古学、文学など多様な学問を取り入れた〝総合的な歴史科学〟ともいえる」と説く。

日本を知る上では欠かせない民俗学という視点について、ゼロから学んでみたい。

【6、7面に関連記事】

小池都知事 学生ら300人を前に講義

各界の第一線で活躍する有識者を迎えて行われる本学の水曜講座が11月28日、渋谷キャンパス常磐松ホールで開催され、東京都の小池百合子知事が学生ら約300人を前に、「2020とその先の東京」と題して講義を行った。

2年後に迫った東京五輪・パラリンピックを「史上最大、最高の東京大会にしたい」と話す小池知事。「ボランティアも主役を支える大きな役目を担っている」と、集まった学生らに2万人を目標に集める都市ボランティアへの参加を呼び掛けた。

また、東京都が「3つ（セーフ、ダイバーシティ、スマート）のシティーを目指している」と話し、無電柱化の推進やバリアフリーのまちづくりなどの取り組みを紹介。「安心安全に生活ができる東京をつくっていきたい」と話した。

学生から「リーダーシップの極意」を質問された小池知事は、クラーク博士の「少年よ大志を抱け」を引用しながら「ビジョンを共有することが重要。大志を具体的な3つの『小志』にして、目標を達成して喜びを分かち合うことを積み重ねてほしい」と自説を語った。

みはるかすもの

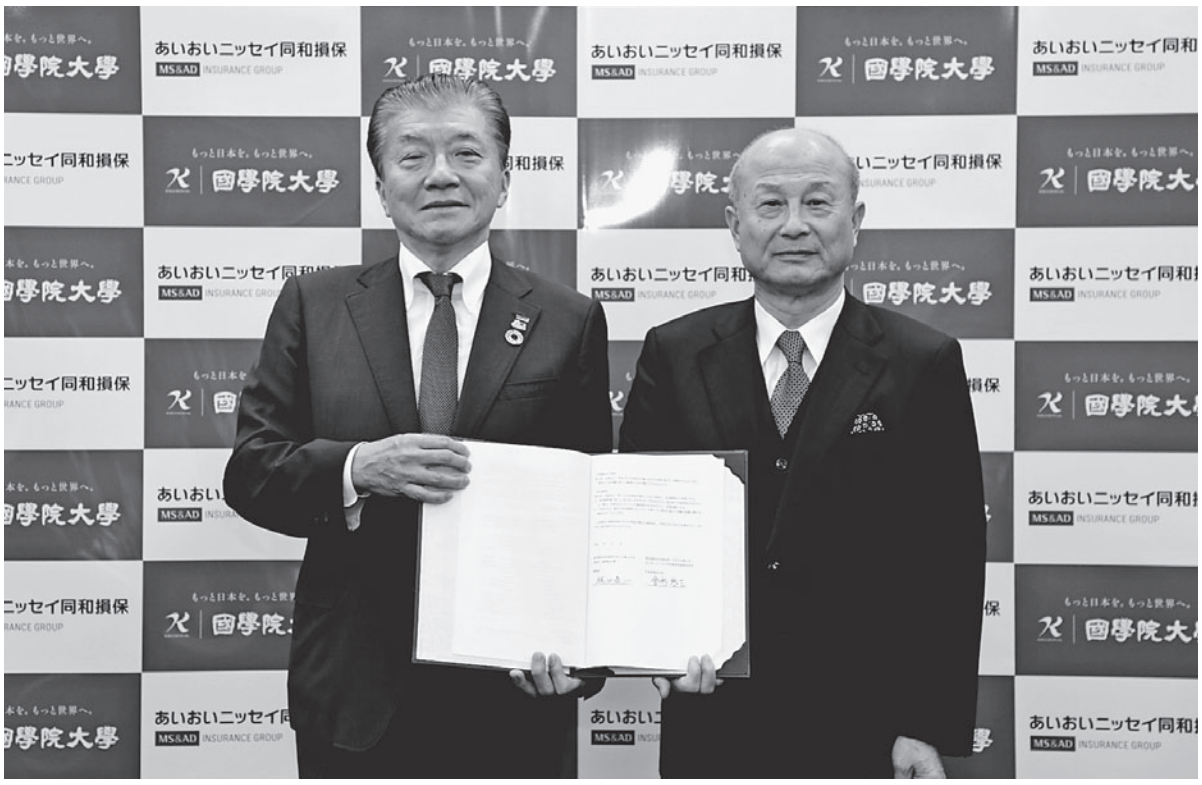
新嘗祭が行われた11月23日は、五千円札に描かれる樋口一葉の命日「一葉忌」。「たけくらべ」「にごりえ」などを世に送り出したのは、24年あまりの生涯の中でわずか1年半だった▼一葉の命を奪ったのは、当時国民病や亡国病といわれるほど罹患者が多かった結核。戦後は急速に罹患率が低下したが、近年、医療機関での集団感染で死者が出ていて、決して過去の病気とは言えない▼平成27年に厚生労働省が発表した日本の結核罹患率の値は、人口10万人あたり14。先進諸国が3から9の値であることからも深刻さがうかがえる▼今年は国内で風疹の患者が、今月2日までに合わせて2400人を超え、25年に次ぐ多さだ。せきやくしゃみを通じて広がる風疹は、妊娠中の女性が感染すると赤ちゃんの目や耳、心臓などに障害が出る先天性風疹症候群となるおそれがある。10月には、米国が日本で風疹が流行しているとして、予防接種や過去の感染歴がない妊婦は日本に渡航しないよう勧告した▼国内の受け止めは米国の勧告ほど深刻だろうか。来年から30～50代の男性を対象に予防接種の原則無料が決まったが、世界の中でも衛生環境が良いとされる中、感染症対策では課題がありそうだ▼厳冬を迎え、インフルエンザの感染が拡大する時期だ。流行する感染症への正しい理解と予防接種などの適切な対処が一人一人に求められている。もちろん、手洗いうがいと、適切な休養は言うまでもない。

主な内容　**2面**／あいおいニッセイ同和損保と連携協定締結　**3面**／人間開発学部創設10周年記念シンポ　**4面**／岡田教授「大嘗祭」を論じる
5面／第21回「狂言の会」　**6・7面**／特集 ゼロから学んでおきたい民俗学　**8・9面**／高校生向けコンテスト入賞者決定
10面／インフォダイジェスト

KOKUGAKUIN UNIVERSITY 140th 1882-2022

最終面から K:DNA　**Ⅰ面**／箱根駅伝 エントリー選手発表　**Ⅱ面**／関東大学ラグビー2部3位

あいおいニッセイ同和損保と連携協定締結



協定書を手にする金杉恭三社長(写真左)と坂口吉一理事長

学校法人国学院大学とあいおいニッセイ同和損害保険（東京都渋谷区）は地域の発展、若年層の育成などを目的とした包括的な連携協定を締結した。今回の協定は、女性の活躍進出、障がい者雇用と定着支援などダイバーシティに関する取り組みや、地域に密着し人々の生活を守るための活動を展開してきた同社、渋谷学や共存学などの地域貢献や持続可能な社会に関する研究を行ってきた本法人とが協働し、誰もが幸せになれる社会の実現を渋谷から考え発信するために連携するもの。国連が提唱する持続可能な開発目標「ＳＤＧｓ」を基礎的な考えとし、さまざまな活動を行っていく。

両者は、平成29年に赤井益久学長と金杉恭三代表取締役社長がトップ対談をした縁で連携を深めてきた。

12月7日の調印式では、坂口吉一理事長と金杉社長が協定書に調印した。坂口理事長は「互いに手を携え、誰もが幸せになれる社会の実現に向けての取り組みを行いたい」と挨拶し、金杉社長は「両者で取り組む事柄は、さまざまな社会課題の解決、持続可能な社会につながる大きな意味を持っている」と応じた。

調印式後には、協定締結を記念して、２０２０年東京パラリンピックの正式種目に選ばれているボッチャの交流試合が行われ、両者の役職員、本学学生が立場や年齢を超えて競技を楽しみ、親交を深めた＝**写真右下**。

立科町と相互連携、協力へ協定調印

学校法人国学院大学は、町内に厚生施設「蓼科寮」がある長野県立科町と相互連携および協力に関する基本協定を結ぶこととなり、11月15日、町役場で調印式が行われた。

本法人と立科町は、昭和33年に白樺高原の町有地に大学寮建設のための土地賃貸借契約を締結して以来、60年の長きにわたる交流関係を構築してきた。

今回の協定締結は、包括的な連携により住民生活の向上、学術研究の向上、地域社会の発展と人材育成を推進することが目的。併せて、「ウガンダ共和国　陸上競技、中長距離種目選手および関係者への宿泊所提供に関する覚書」を交わした。

町は、2020年東京五輪・パラリンピックでウガンダの選手と住民が交流するホストタウンに名乗りを上げていて、同国の陸上中長距離選手は蓼科寮を拠点として事前合宿を行う。

調印式には、同町の米村匡人町長、西藤努町議会議長、本法人から坂口吉一理事長、石井研士理事（副学長）が出席。協定書に署名し笑顔で握手を交わした。

21世紀研究教育計画外部評価委員会を開催

学校法人国学院大学は10月１日、中期計画「21世紀研究教育計画」の進捗に関する客観的な評価を受けるため、21世紀研究教育計画委員会の下に外部評価委員会を設置した。外部評価委員には、有識者、経済界、神社界、卒業生、保護者らから５人の委員が選出され、第１回会議が11月20日、渋谷キャンパスで開かれた。

会議に先立ち坂口吉一理事長は「率直なご意見をいただき、事業計画を遂行していくために役立てていきたい」と挨拶した。委嘱状の交付に続いて、委員長に河田悌一・一般社団法人大学資産共同運用機構理事長を選出し、具体的な議事が進められた。

「読者の求める『西郷』描く」
林真理子氏が講演、５００人を魅了

大河ドラマ「西郷どん」の原作者で直木賞選考委員を務める林真理子氏を講師に迎えた国学院大学文化講演会が11月17日、渋谷キャンパスで開かれた。「西郷隆盛という人」と題して講演した林氏は「妻・愛加那（あいかな）の存在抜きに西郷を描くことはできないと考えた。さらに、長男・菊次郎の視点で分かりやすくアプローチすることを念頭に置いた」と述べ、会場に詰めかけた５００人を超す聴衆を沸かせた。

講演の冒頭、「国学院大学はレベルが高いので緊張している」と聴衆を笑わせた林氏。ユーモアを交えつつも、「西郷という人物は分からない。調べれば調べるほど大きくなり、大きく立派な人に描くと遠い存在に、親しみある人にすると（人物が）小さくなる」と創作の苦労を吐露した。

また、ドラマでは俳優の西田敏行さんが語りを兼ねて演じる菊次郎について、「（南洲）顕彰館を訪れた際に脚本家の中園ミホさんは弟の従道に注目したが、私は菊次郎の写真に引かれた」と、認知度が低い菊次郎を物語の舞台回しに選んだいきさつを紹介。さらに、「海音寺潮五郎先生の描く西郷隆盛像は難しく、読み通せない人が多い。だが、菊次郎の視点からならいけると思い、菊次郎が明治37年に京都市長に就任した際に父を回想するシーンから小説をスタートさせた」と語った。

質疑応答では、「歴史を伝えるための力点は」との質問に、「平易だが格調を失わないこと。徹底的に調べていくらでも書けるが、史実の中から読者が欲する物をピックアップした」と答え会場を唸らせた。

西郷隆盛について語る林真理子氏

教職員人事

［退職］

◆自己都合

◎大学事務局◇専任▽神山幸子（財務部経理課書記）

以上、平成30年12月31日付

新潟コメ作りWS 彬子女王殿下 学生らと新米のお食事会

彬子女王殿下（本学特別招聘教授）が総裁を務められる一般社団法人心游舎と本学の 共催による「新潟コメ作りワークショップ」の食事会が12月４日、渋谷キャンパスで行われた。

同ワークショップは今年で３回目となり、新潟市北区の農園で、田植え、草取り、稲刈りを行ってきた。食事会には、彬子女王殿下がご出席になり、坂口吉一理事長以下役教職員、学生約20人と、収穫した新米をお召し上がりになられた。

増山正芳さん（神文４）は「自然栽培、農家の方のコメ作りへの熱い思いに触れることができた」と３年間の取り組みを振り返った。彬子女王殿下は「毎年ワークショップの質が上がってきたのは、皆さんが熱心に参加して一緒に作り上げてくれたからだと思いました」とお言葉を述べられた。

辰巳名誉教授　日本学賞を受賞

日本学の各分野の最高の業績を顕彰する今年の日本学賞（日本学基金主催）に、辰巳正明名誉教授が選ばれた。辰巳名誉教授は長年にわたる「東アジアを視点とする古代和歌・詩の本質の解明」の業績が評価され、今回の受賞となった。

贈呈式は11月23日、学士会館（東京都千代田区）で行われ、中西進会長から賞状などが贈られた。

平成７年に『万葉集と中国文学』で博士（文学）を取得。大東文化大学教授などを経て、12年本学文学部教授。27年３月に定年により退職し現在名誉教授。主な著書に『詩の起原』（笠間書院）などがある。

3氏に学位記を授与

国学院大学は、学位申請のあった飯泉健司埼玉大学教授、松本洋幸大正大学准教授、黒﨑浩行神道文化学部教授に対し、審査の結果、学位を授与することを決定した。授与式は12月５日、渋谷キャンパスで行われ、赤井益久学長から学位記が贈られた。

◎博士（文学）＝飯泉健司氏

飯泉氏の学位論文は「播磨国風土記神話の研究―神と人の文学」。主査は、谷口雅博・文学部教授、副査は野中哲照・文学部教授、神田典城・学習院女子大学教授、橋本雅之・皇学館大学教授。

◎博士（歴史学）＝松本洋幸氏

松本氏の学位論文は「近代日本における水道整備課程の歴史的研究」。主査は、上山和雄・大学院客員教授、副査は根岸茂夫・文学部教授、有馬学・九州大学名誉教授、中村尚史・東京大学教授。

◎博士（宗教学）＝黒﨑浩行氏

黒﨑氏の学位論文は「現代日本社会における神道文化の役割と課題に関する宗教社会学的研究―地域再生・メディア・災害復興―」。主査は、井上順孝・大学院客員教授、副査は石井研士・神道文化学部教授、弓山達也・東京工業大学教授。

人間開発学部創設10周年

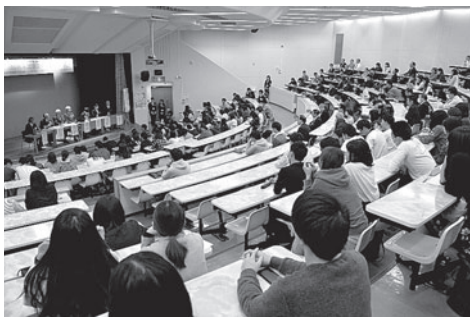
記念シンポジウムを開催 さらなる発展に期待込める

人間開発学部の創設10周年を記念したシンポジウムが11月10日、たまプラーザキャンパスで開かれた。多くの役教職員や現役学生らが聞き入る中、学部の現役学生・教員と院友が「人間開発学部10年の歩みと展望」と題し、これまでの思い出を懐かしむとともに、さらなる学部の発展に向けた期待を語り合った。

シンポジウムには、初代学部長の新富康央教授と宮川八岐、木村一彦の両元教授、教員やスポーツ界の指導者に就いている院友３人、コーディネーター役を務めた田沼茂紀学部長（教授）の計７人が登壇した**＝写真上＝**。

木村元教授は大学院の新設を提言し、「大学院をつくることにより、人間開発学に取り組む人が増え、学部も進化していくだろう」との考えを示した。宮川元教授は「今後も一層、学部名にふさわしく、子ども、保護者、教員仲間、そして社会に尊敬され、信頼される人間性豊かな教員を輩出する大学であり続けてほしい」と呼びかけた。

学部の設置構想段階から中心的な役割を果たし、今年度を最後に退職する新富教授は「本学部を巣立った人たちは、日本の教育を変えていく存在にならなければいけない」と強調。学部の教員陣に向けては、「人間開発学は学問として確立されているとは言い難い。学問としての構築を目指してもらうことを宿題にしたい」とエールを送った。



大勢の学生らが聴講した

これに対し、田沼学部長は「創設10周年は一里塚にすぎず、これからが本番だ。20周年、30周年へ向け、進むべき道の新たな原点について、さまざまなご意見をいただけたことに感謝したい」と結んだ。

人間開発学部は平成21年、人間科学を中心とする学際的、実践的な学問を教授することにより、教員や指導者らの養成を目的とする初等教育、健康体育の２学科で構成される学部として創設。25年には、幼児教育や保育に関わる人材を育成する子ども支援学科を新設し、３学科を擁する学部となって現在に至る。今春には６期生を送り出し、これまでに約１６００人の院友が各界で活躍している。

渋谷４大学協定

「多様性と共生社会」テーマに 初のパネルディスカッション開催

パネルディスカッションを行う石井研士副学長（左から2人目）ら4大学の教授陣

渋谷区内にキャンパスを持つ４大学（国学院、青山学院、実践女子・同短期大学部、聖心女子）が11月24日、青山学院大学青山キャンパスで、「多様性と共生社会」をテーマにした講演会とパネルディスカッションを共同で開催した。

今回の催しは、各大学が持つ学術資産を基に社会に貢献することを目指し、昨年12月に４大学で締結した包括協定に基づいて行われた。協定に基づく４大学共同のパネルディスカッションは初めて。

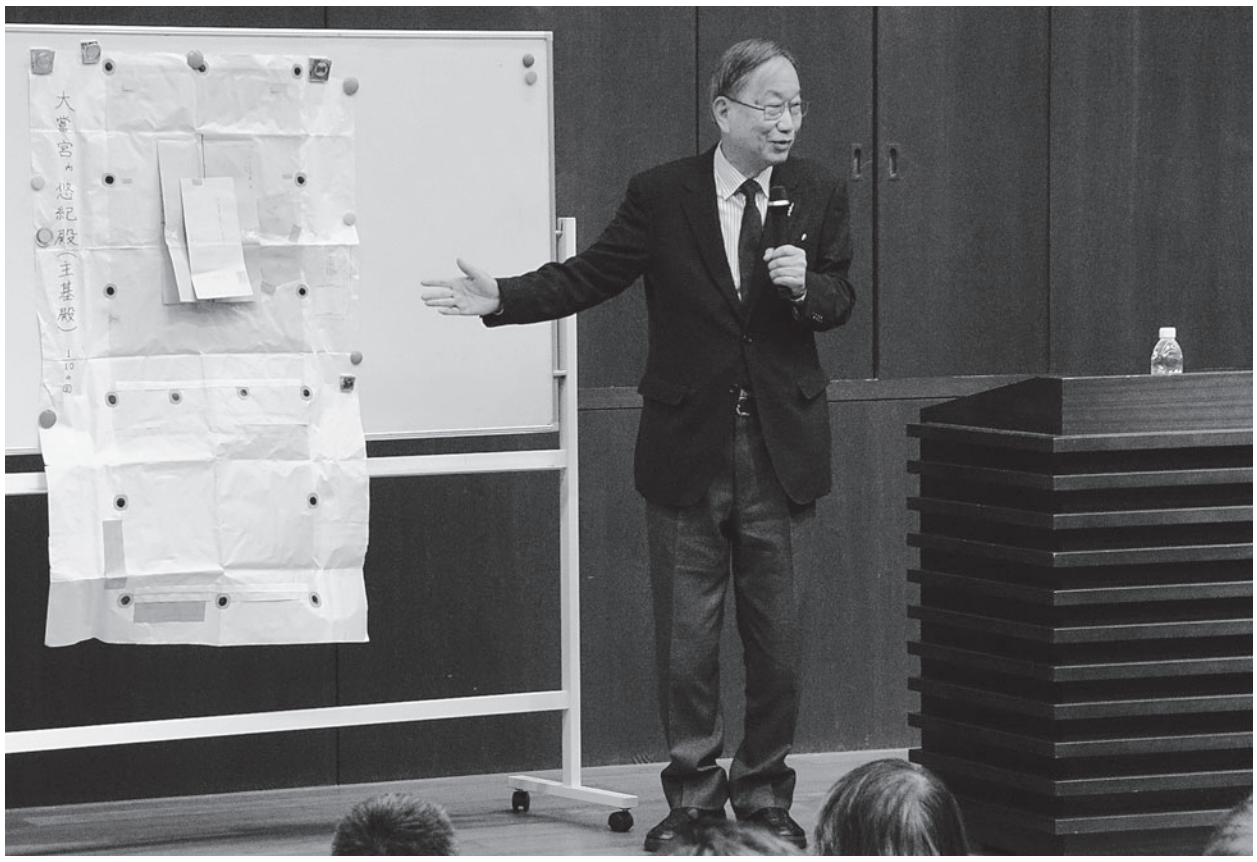
講演会に招かれた長谷部健渋谷区長は「多様性に係る渋谷区の取り組み」と題して基調講演。同区の基本構想「ちがいをちからに変える街」のビジョンや多様性社会を推進する取り組みなどに触れながら、「（多様性を阻む差別は）当事者だけの問題ではない。取り囲む周りの人の意識の変化が求められている」と強調した。

パネルディスカッションには、４大学の教授陣が登壇。本学からは、渋谷の変遷などを多方面から紹介する、研究開発推進センターとの共著『渋谷学』（弘文堂）がある石井研士副学長・神道文化学部教授が参加し、「多義的存在様式を含みつつ、持続的な発展を可能とする社会を考察する試みである『共存学』を大学として推進したい」と述べた。

青山学院大学の飯笹佐代子教授は「多文化共生」をテーマに、カナダ・ケベック州の多様な宗教を学ぶ小学校の教材などを紹介した。

実践女子大学の広井多鶴子教授は「ジェンダー」と題し、経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）加盟国の平均値として、女性の高等教育修了者の割合が男性を上回っていることなどを紹介した。

聖心女子大学の大橋正明教授は「グローバル共生」と題し、難民受け入れ態勢について、日本で議論が進んでいない現状に警鐘を鳴らした。会場に集まった区民や４大学の学生、教員らは、各教授の報告に耳を傾けつつ、疑問に感じた点などを質問していた。



岡田教授「大嘗祭」を論じる 常磐松ホール満員の盛況

国学院大学研究開発推進機構（根岸茂夫機構長）の公開学術講演会が11月17日、渋谷キャンパス常磐松ホールで開催され、岡田荘司・神道文化学部教授が「古代と近代の大嘗祭と祭祀制」と題して講演した。皇位継承の「御代替わり」でクライマックスに位置づけられる「大嘗祭」を1年後に控え、会場には定員の250人を超す聴衆が詰めかけた。

講演で岡田教授は「古代から近世にかけ、自然景観を背景とした地域の神社祭祀と、宮殿祭祀の系譜をひく天皇祭祀の二重構造だった」と解説。さらに、「かつては全国の神々である天神地祇を祀るのは地方の民だった。天皇がお祭りできるのは天照大神だけだったが、明治維新で祭祀権の一元化が進められ、天皇親祭が確立した」とした。

大嘗祭の源流については、「壬申の乱（672年）でそれまでの祭祀システムが解消され、乱に勝利した天武天皇によって天照大神に対する信仰が高められたのが契機」とし、「天武天皇2（673）年の祭祀では都周辺以外の地域で取れたコメが用いられている。現在の大嘗祭につながるもので、日本国中を天皇が統治する古代国家の成立を示すもの」と指摘。

一方で、「7世紀の壬申の乱以後と同じく、19世紀の戊辰戦争によっても従来のシステムが一新され、卜部氏や中臣氏、白川家や吉田家など神道に関わってきた人々が排除されるとともに、『五箇条御誓文』を機に『神降ろし』など近代の作法が作られていった」と述べた。

また、岡田教授は古くから大嘗祭の神饌（しんせん）にアワが含まれていることに注目。「国民生活が安定するよう、（救荒食になる）アワの収穫も併せて祈願したと考えられる。大嘗祭は国民＝大御宝（おおみたから）が疲弊しないようにとの思いがこもった『稲と粟の祭』であった」との持論を展開した。

国内外派遣研究員決まる

国学院大学の平成31年度派遣研究員「研究課題」研修先、派遣期間が次の通り決定した。

【国内派遣研究員】◇文学部…小川直之教授「民俗芸能に関する折口理論の再検討」柳田國男記念伊那民俗学研究所、宮崎県立博物館など、4月1日～平成32年3月31日▽高橋昌一郎教授「ファイヤアーベントの哲学研究およびゲーデルの不完全性定理の新訳完成」東京大学図書館など、4月1日～平成32年3月31日▽吉岡孝教授「明治維新の再検討」国立公文書館、東京大学史料編纂所、国学院大学図書館など、4月1日～平成32年3月31日▽宍戸節太郎准教授「オーストリア＝ハンガリー帝国期ドイツ語圏文化の複眼的考察」リュブリャナ大学図書館（スロヴェニア）、国学院大学図書館など、4月1日～平成32年3月31日◇法学部…門広乃里子教授「寄与分制度の再検討―家族による介護の法的評価と公平な遺産分割を目指して―」上智大学図書館、国学院大学、4月1日～平成32年3月31日▽宮内靖彦教授「武力行使の機能変容」早稲田大学図書館、Institute of Advanced Legal Studies（英国）、国学院大学0711研究室、4月1日～平成32年3月31日◇経済学部…高橋克秀教授「保護貿易の高まりと日本およびグローバル経済へのインパクトに関する計量的研究―BREXITとNAFTA再交渉を契機として―」国学院大学図書館、国学院大学0917研究室、4月1日～平成32年3月31日▽水無田気流教授「メディアとダイバーシティ」早稲田大学教育学総合研究科、4月1日～平成32年3月31日◇神道文化学部…齊藤智朗教授「近代皇室・神社制度の展開に関する研究―国学院大学関連人物を中心に―」京都府立京都学・歴彩館、島根県立図書館、熊本県立図書館など、4月1日～平成32年3月31日◇人間開発学部…太田直之教授「日本中世の宗教意識に関する研究」東京大学史料編纂所、国学院大学図書館、4月1日～平成32年3月31日

【国外派遣研究員】◇文学部…小手川正二郎准教授「現象学的倫理学の基盤研究とその応用倫理学的展開」ペンシルベニア州立大学（米国）、4月1日～平成32年3月31日◆法学部…大江毅准教授「民事訴訟手続・非訟事件手続の手続連携に関する、比較法的手法を一視覚とした、基盤的研究」ケルン大学手続法・倒産法研究所（ドイツ）、10月1日～平成32年9月30日◇経済学部…杉山里枝教授「三菱財閥の経営組織とアメリカ大企業における経営組織の展開に関する国際比較研究1917-1946」ハーバード大学（米国）、10月1日～平成32年9月30日◇人間開発学部…長田恵理准教授「イタリアの言語教育政策と小学校外国語指導者養成および現職教員研修の実態と課題―日本の教員養成課程への応用可能性の検討―」シエナ外国人大学（イタリア）など、4月1日～平成32年3月31日◇大学事務局▼国際交流事務部国際交流課…大久保有紗書記「英国の留学生獲得競争現状の研究・調査など」ランカスター大学（英国）など、10月1日～平成32年3月31日

人間開発学部 地域住民と体を動かし、健康を考えるスポーツフェスティバル

人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンター主催の「第4回地域交流スポーツフェスティバル」が11月25日、たまプラーザキャンパスで行われた。

「スポーツ科学を、もっと身近に」をテーマに、本学教員と人間開発学部生が企画。地域住民を対象に、体力測定や栄養・体組成チェック、最新のスポーツ科学を基にしたボール投げ教室などが開かれた。

体力測定のコーナーでは、高齢者にはバランス能力を、幼児には敏捷性を測るテストなどが用意され、子どもからお年寄りまでが楽しみながら学生たちと体力測定を行った。

文学部 英語で落語を楽しみ、小噺を実演

文学部外国語文化学科の「文化発信型英語力開発活動」の一環として11月22日、鹿鳴家英楽師匠による英語落語のセミナーが渋谷キャンパス130周年記念5号館で開かれた。

国内外で英語落語の公演を行うこの企画は今年で3回目。英楽師匠は、日本独自の文化で、庶民の暮らしや風俗を描く落語をどのように英語で表現しているかなどを紹介し、古典落語の「真田小僧」を英語で披露した。

その後、参加者が高座に上がり、英語の小噺を実践。英語落語の世界を楽しんだ。

法学会講演会 身近な消費者問題に警鐘鳴らす

国学院大学法学会が主催する講演会が11月22日、渋谷キャンパスで行われ、国民生活センター総括主任相談員で本学兼任講師の吉松惠子氏が「大学生も知っておくべき消費者問題～なぜ消費者法を学ぶ必要があるのか～」と題し講演した。

講演では、国民生活センターなどで問い合わせが増えているという若者にかかわる消費者トラブルについて、具体的な事例と消費生活センターの対応例を紹介。「消費者トラブルに遭わない、解決するためには消費者法を学ぶ必要がある」と語った。

聴講した「民法・債権各論A」（佐藤秀勝教授、川村尚子講師担当）履修学生らは、大学生の身に起こった具体的な紛争事例や消費者法の意義に熱心に耳を傾けた。

第21回「狂言の会」
笑いに包まれ6番組上演

「米市」を熱演する山本東次郎さん(右)ら

今年で21回目を迎えた大蔵流山本東次郎家による狂言鑑賞会「狂言の会」が11月13、14の両日、たまプラーザキャンパスで行われた。人間国宝の山本東次郎さん（昭36卒・69期文）による解説も加わり、2日間で6番組（演目）が上演された会場は笑いに包まれ、訪れた人たちはユネスコ無形文化遺産「能楽」の一部である狂言の魅力を楽しんだ。

狂言の会は、東次郎さん一門の協力で続いており、近隣住民らにとっても〝秋の風物詩〟として親しまれている。2日間で計800人の抽選枠に今年は約950通の応募が寄せられ、変わらぬ人気ぶりをうかがわせた。

上演された番組は、初日が「八幡（やわた）の前」「磁石」「地蔵舞」。開演に先立ち、文教大学の田口和夫名誉教授が「狂言の昔と今その二十」と題して講演し、室町時代の資料などを参照しながら、2日間に演じられる番組のあらすじや見どころを紹介した。

2日目は、「二人大名」「附子（ぶす）」「米市」を上演。この日、特別枠で招かれた地元小学校の6年生約400人は、教科書にも掲載されている古典芸能の舞台に興味津々の様子だった。

東次郎さんは上演後の解説で、番組の組み合わせを決める際には「『やるまいぞ、やるまいぞ』のせりふで終わる『追い込み』といった曲の結末など要素が似たものにならないよう気をつけている」と明かした。

鑑賞は昨年に続き2度目という女性は「昨年、東次郎さんが気さくに質問などに答えてくれたことを思い出し、今年も応募した。最前列の席に座わることができ、舞台までの距離が近くて、より迫力を感じた」と満足げ。初めて狂言を鑑賞したという男性は「狂言は難しいものだと思っていたが、よく分かる内容で、興味を持つきっかけになった。来年も、ぜひ見に来たい」と堪能していた。

LLC講演会
ジャーナリスト・丸山氏が講演

教育開発推進機構主催の公開講演会「旅で身につけたコミュニケーション～考古学からジャーナリストへ～」が11月17日、渋谷キャンパスで開催され、院友でジャーナリストの丸山ゴンザレスさんが学生ら約160人に対して講演を行った。

丸山さんは本学大学院で考古学を学んだ後、出版社勤務を経てフリージャーナリストとして活動。海外危険地などに赴き多くの取材を重ね、執筆活動やテレビ出演など多方面に活躍している。

丸山さんは、日本語や英語が通じない海外での取材経験や自身が身につけたコミュニケーション術を紹介。「海外で初対面の人と接する場合は自分との共通項を探すようにしている」「言語の習得はまず海外に飛び出てみることから始まる」と語った。聴講した学生たちは、映像や写真を交えたトークを熱心に聞き入っていた。

経済学部
高校生が大学生活を一日体験

経済学部生の生活や授業を体験してもらおうと経済学部主催「E-Tour」が9月と11月に行われた。11月17日に行われたイベントには、約100人の高校生が参加。ファシリテーター＆アドバイザー（FA）の在学生らのサポートを受けながら、学部・学科紹介やアクティブ・ラーニング型の模擬授業などを受け、経済学部生の一日を体験した。

FAとして、受験生を迎えた中村豊さん（経営3）は「来年度以降も高校生がより参加しやすいように、学生が一丸となって計画を実行していきたい」と初めての試みに手ごたえを語った。

たまプラーザキャンパス
工事に伴い正門を閉鎖

たまプラーザキャンパスでは12月3日から、校舎の外装や外構の工事が始まった。これに伴い、工事対象となる正門から1号館1階入り口までの区域が閉鎖され、通行止めとなっている。

たまプラーザ事務課では、来年3月末（予定）までの工事期間中、体育館側の東門からの通行を呼び掛けている。

学問ノ道 第13回
◉「古代信仰の元の姿」と大嘗祭
折口信夫「大嘗祭の本義」②

平成30年11月29日、「来訪神　仮面・仮装の神々」がユネスコ無形文化遺産代表一覧表に記載された。

正月や春の初めに来訪する神（まれびと）が、言葉（呪言）によって人々に幸せをもたらすことは、折口信夫（国文学者・民俗学者、1887～1953）の祭祀論・日本文学発生論と深く関わっている。さらにその主著である『古代研究』3冊のうち、民俗学篇2（昭和5年）に収められた「大嘗祭の本義」とも無関係では無い。

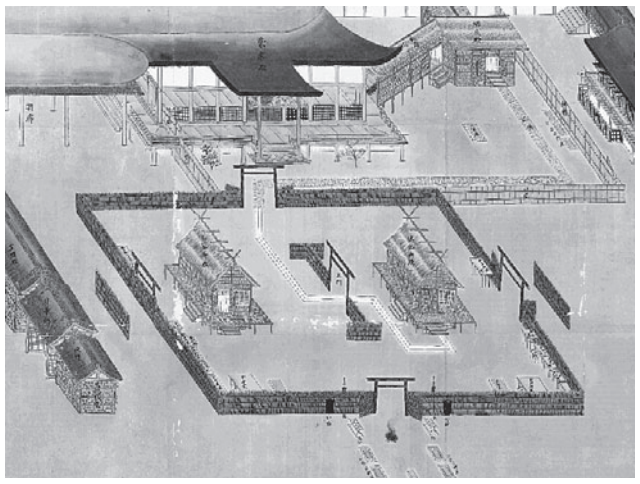
「大嘗祭の本義」は、折口独自の祭りについての《仮説》にもとづくものである。それは、冬を春にする言葉を発する神の出現（春祭り）、秋に収穫の報告をする（秋祭り）、冬に「外来の威霊」を身につける（冬祭り）というサイクルである。これを「大嘗祭の本義」では、大嘗祭に於いて天皇が神に神饌を捧げる神饌供進を《秋祭り》、大嘗宮神殿中央に置かれた神座（寝座）に籠もって天皇が天皇霊を身につけることを《冬祭り》、高御座に昇って天皇が言葉を発する即位式を《春祭り》にあてはめる。この《仮説》では本来は別々の儀式である大嘗祭と即位式とを一続きの儀式と捉える。そして、このような一続きの祭りが、やがて暦法の変化によって、別々になったとする。さらに、神座（寝座）を「真床襲衾（まどこおふすま）」と呼ぶなどして天孫降臨神話と大嘗祭・即位式を結びつけた。

『古代研究』民俗学篇1（昭和4年）に収録された「ほうとする話」においては、高御座に昇った天皇は「遠くより来たまれびと神であり、高天原の神でもあった」としている。

また、天皇が神座（寝座）に籠もるという作法は資料にはみえないが、高御座に昇った天皇が神として言葉を発することを前提に想定されているといえよう。なお、実際の大嘗祭は即位式の後に行われる。

このような、折口の《仮説》は、その独特の直感によって、類似する古典と各地に残る儀式・行事を結びつけながら想定された《古代信仰の元の姿》であった。

『古代研究』の「追ひ書き」によれば、その三冊は、柳田國男の民俗学を国学に取り入れ、「新しい国学の筋立てを模索した痕」であった。そして、「新しい国学を興す事」は、「古代信仰の元の姿」を見ることでもあったのである。


「大嘗会御神殿絵図(部分)」(国学院大学博物館所蔵)

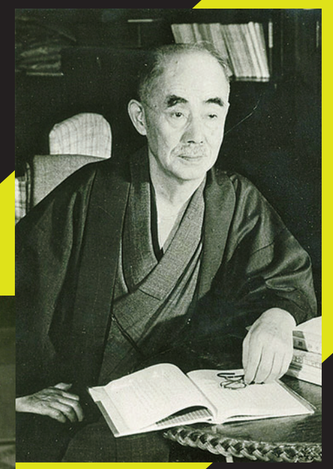
研究開発推進機構准教授　大東敬明

ゼロから学んでおきたい 民俗学

新谷尚紀・文学部教授に聞く

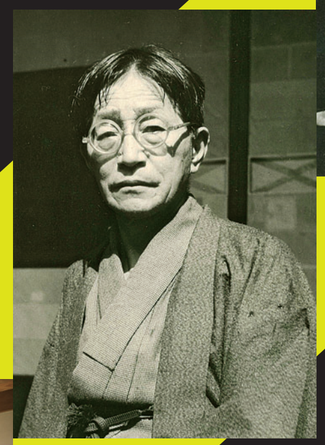
伝承と変遷が刻む民俗学の歴史

日本で最初に民俗学の講座を設置した国学院大学。現在は文学部日本文学科伝承文学コースを中心に、日本各地に伝わる習慣や文化を学ぶ民俗学研究が行われている。日本、そして日本人とは何かを知る上で欠かせない民俗学という視点。その歴史や研究手法について、新谷尚紀・文学部教授に話を聞いた。



YANAGITA KUNIO

柳田國男（明治8年～昭和37年） 飾磨（しかま）県（現・兵庫県南西部）出身。東京帝国大学法科大学卒。農商務省に入り貴族院書記官長などを歴任後、朝日新聞社に入り論説などを執筆。その後、国際連盟委任統治委員。大正2年、雑誌『郷土研究』を創刊。昭和10年、民間伝承の会（現・日本民俗学会）を創始し、日本民俗学の確立と研究の普及に努めた。26年、国学院大学教授に就き神道に関する講座を担当。同年、文化勲章受章。



ORIKUCHI SHINOBU

折口信夫（明治20年～昭和28年） 大阪府出身。国学院大学国文科卒。大阪府立今宮中学の教員を経て、大正8年から国学院大学講師、11年から同教授。12年から慶応義塾大学講師兼任、昭和3年に同教授となり、多くの門弟を育成した。7年、雑誌『土俗と伝説』を発行し国文学研究への民俗学導入という独自の学問を形成。この他にも『民俗芸術』『民俗学』などを創刊した。歌人、詩人としても活躍し、23年に日本芸術院賞受賞。

学問としての萌芽

日本で「学問」と呼ばれるものは多くが欧米から輸入されたものであり、「民俗学」の創始も例外ではない。19世紀のドイツで、「ドイツ国民とは何か」を問うvolkskunde（フォルクスクンデ）＝民俗学が生まれた。英国ではfolklore（フォークロア）＝民俗学として、庶民の習俗や文化の研究が行われた。しかし、欧米での民俗学は単独では学問として大成せず、人類学や社会学が発達した。

1910年代初頭の日本は、明治維新を経て兵士や職工として国のために働く者が増えていた。日清・日露戦争での勝利により、民衆こそが国力であり、民俗風習にこそ国力の根幹があるという考えが生じたこの時期に、欧米から「民俗学」が入ってきたという経緯がある。

当時、明治政府は日本を近代国家にするために画一的なルールを敷くことを図った。一方で柳田國男は、日本を知るためにはそれぞれの郷土の歴史と民俗伝承、風俗習慣など小さな事実をていねいに調べ、意味を理解する必要があると考え、「郷土研究」を始めた。まだ学問として体系化されていなかったが、ここから柳田の民俗学が始まったといえる。

柳田が昭和5（1930）年に発表した『蝸牛考』という論文がある。日本全国のカタツムリの呼び名を調べたところ、地域や時期によって「デンデンムシ」「マイマイ」「ナメクジ」などさまざまな呼び方があることを発見した。近畿地方を中心に「デンデンムシ」、中国、四国、九州地方から関東地方の広い範囲で「マイマイ」、北関東～南東北地方で「カタツムリ」。さらに調べると、青森や長崎、大分の山間部では「ナメクジ」と呼ぶ地域があることも分かった。調査結果をデータマップ化すると、柳田は近畿地方から同心円状に呼び名が分布することを見つけ、方言の語や音など文化的中心地から周辺に向かって変化し、伝播したと推定する「方言周圏論」を提唱した。

古代の文献には、平安時代半ば（900年代）の『和名抄』に「カタツムリ」という言葉が、そして江戸時代前期（1600年代）の京都の風俗を描いた『日次記事』に「でで虫」という呼び名が登場する。こうした文献を調べただけでは「カタツムリは平安時代、デンデンムシは江戸時代以降に使われた呼び名」ということしか分からないが、聞き取りやフィールドワークを行って全国各地のデータを集め、分類、整理すると、それらよりナメクジが古かったことが明らかになる。フィールドワークにより、物事の変遷を見るのが柳田の手法であったが、当時、それを理解する学者はおらず、唯一、折口信夫だけが共鳴し、師と慕うのであった。

国学院と民俗学

柳田は、folkloreの訳語としての「民俗学」ではなく、tradition populaire（トラディションポピュレール）というフランス語を「民間伝承」と訳し、これを自らの学問と主張した。「tradition（トラディション）＝文化の伝承は時間や空間を超えて伝える力であり、その裏にはtransition（トランジション）＝変遷がある」。つまり、歴史の中には伝えられるものと変わるものがあり、その二つである「伝承」と「変遷」が共存し、歴史が刻まれているのだというのが柳田と折口の考えである。

科学技術の発展や社会の変化に伴い、価値観も変わり続けるが、われわれの“日本人らしさ”はいろいろな行事や習慣の中に、有形無形さまざまな形で残っている。このように、伝承の研究によって日本人という存在を考え、知ることが、柳田と折口の主張する学問であった。これは欧米の「民俗学」とは異なり、江戸時代に国学者の本居宣長らによって確立された日本独自の学問「国学」の流れをくみ、柳田は自らの民俗学を「新国学」とも称した。

教授であった折口の尽力により、昭和15（1940）年4月、本学に民俗学の講座が新設された。折口は以前から「民間伝承学」という名称で柳田の学問を教えていたが、正式な講座になるにあたり、広く知られていた「民俗学」という名称に改めることとなったのである。

こうして、柳田と折口により創生された学問は「民俗学」として、国学に深く通じるこの国学院大学において研究が続けられ、発展してきたのだ。

伝承分析のおもしろみ

私は学生時代に偶然、柳田が主宰した「民間伝承の会」の機関誌を図書館で読み、民俗学を学ぼうと志した。歴史学、考古学に加え、柳田の手法である伝承学、さらに最先端の分析科学なども取り入れた“総合的な歴史科学”ともいえる柳田の民俗学に感銘を受け、それを継承したいと考え、今も学生を指導している。

民俗学は、例えれば上書きや消去を繰り返されたパソコンのデータの履歴を解明すること。現代人には、この説明が最も分かりやすいのではないか。過去の経験は消しても、その履歴は全て「伝承」に残っている。それを分析することが民俗学のおもしろみである。（談）

新谷尚紀 文学部教授

柳田國男と折口信夫が創生した学問を継ぐ

年末年始の風習アレコレ

日本にある年中行事の多くは旧暦の時代に形作られたものです。旧暦とは、古くから日本で使われていた、月の満ち欠けをもって一カ月とする暦です。明治6（1873）年からは、すでに世界で使われていた太陽の動きによるグレゴリオ暦（西洋暦）を日本も採用し、それを新暦と呼んでいます。日本の風習には太陽の一巡を基準とする、冬至、夏至や春分、秋分といった旧暦のころと同じ節季も残っています。

では、なぜ正月はおめでたいのでしょうか？ それは、「年取り」の祝いだったからです。かつては誕生日ではなく、正月が来るたびに皆が一斉に年を取る「数え年」でした。人々に新しい年齢と、一年を生き抜く生命力や幸運を与えてくれる神様である年神様がやってくるのが正月なのです。古くから、われわれ日本人には年神様を盛大に迎えるための行事があり、それらは変遷をたどりながら今に伝承されているのです。

正月事始め

正月を迎える準備を始める日。旧暦の12月13日は鬼宿日で、婚礼以外全てのことが吉だとされ、新暦でも伝承されています。

大掃除

農家や商家の煤払いを受け継ぐもの。旧年の災厄を払い、心身ともに清らかにして年神様を迎えるための行事です。「苦」が付く12月29日、旧暦で大晦日だった30日を避け、28日までに終わらせるのが良いとされています。

初詣

家族そろって家に籠もり、年神様の来訪を待つのが古くからの元日の過ごし方でした。江戸時代中期、その年によって変わる年神様のいる方角を「恵方」と呼び、恵方にある社寺に参詣する「恵方参り」が流行し、これが現在の初詣の起源とされています。

お年玉

お供えからおろされた食べ物は神様からの賜り物と考えられ、特にコメを使った鏡餅は神様の力が宿り、これを食べることにより一つ年を取ることができるとされていました。このありがたい餅を商家の主人が使用人に与えたり、親が子に与えたりしたのがお年玉の起源で、江戸時代には餅に代わって着物を新調して贈っていました。戦後になって、広く一般的に現金が贈られるようになったといわれています。

おせち

宮中で元日や節句などの「節日（せちび）」に神様に供えていた「節供（せちく）料理」に由来します。江戸時代から庶民にも定着し、年神様に供えた料理のおさがりをいただくことで、力を授かれると考えられてきました。重箱に料理を詰めるようになったのは明治・大正時代以降といわれています。

小正月

旧暦では、毎月15日が満月に当たります。その年初めての満月を家庭で祝い、小豆粥を食べて一家の健康を祈願したり、紅白の餅を飾り木につけた「餅花」を作って豊作を願ったりします。門松などの正月飾りを焼いて清めるどんど焼きなどが行われてきました。現在では、この日を「正月の終わり」と考えることが多いようです。

第22回 全国高校生創作コンテスト

文部科学大臣賞に浦和第一女子高（埼玉）

全国高校生創作コンテストは、創作活動を通じて文章を書く喜び、ものを創り出す苦しさ、自分の考えを言い表す難しさを感じ取りながら、美しい日本語の再発見と学修を目的として平成9年から開催されている全国規模のコンテスト。今回で22回目を迎え、全国から1万6085点の応募があった。内訳は、短篇小説971点▽現代詩の部1265点▽短歌の部4174点▽俳句の部9675点―だった。

厳正な審査の結果、最優秀学校賞の文部科学大臣賞をはじめ**別表**（敬称略）のように決定し、文部科学大臣賞には浦和第一女子高（埼玉）、特別学校賞には太田高（群馬）と大村高（長崎）が選ばれた。

130周年記念5号館で行われた表彰式には、入賞者と関係者、審査員、赤井益久学長、加藤圭子若木育成会会長、加藤元茂院友会常務理事、西健太郎高校生新聞編集長らが出席。挨拶に立った主催者代表の赤井学長は「日本文化の本質は言葉にある。今後も日常の生活の中で感動・共感したことを言葉にする活動を続けてほしい」と高校生を激励した。

表彰状を受け取る短篇小説の部最優秀賞の野口創さん

文部科学大臣賞

浦和第一女子高（埼玉）

特別学校賞

太田高（群馬）／**大村高**（長崎）

短篇小説の部

最優秀賞

野口創「遠き虹への反逆」
（福岡・筑紫丘高２年）

優秀賞

一丸日向子「蝉氷」
（埼玉・浦和第一女子高１年）

馬場清歌「日曜日」
（埼玉・淑徳与野高３年）

現代詩の部

最優秀賞

藤井志穂「ながめの息を」
（広島・舟入高２年）

優秀賞

奥田由珠香「衷情」
（東京・女子学院高１年）

村上陽香「ひと言ぶんの等星」
（北海道・立命館慶祥高１年）

短歌の部

最優秀賞

永田海生（長崎・大村高３年）

優秀賞

宮﨑淳也（佐賀・早稲田佐賀高２年）

谷英里紗（千葉・安房高３年）

俳句の部

最優秀賞

荒井洋太（群馬・太田高２年）

優秀賞

田嶋堅（青森・七戸高２年）

谷野陽輝（埼玉・開智高２年）

短篇小説の部

◎**佳作**　三枝鈴音「色」（広島・呉三津田高1年）▽藤原有梨「クオリア」（兵庫・小野高2年）▽山口真依「言の葉」（神奈川・市立川崎高2年）▽片瀬愛梨「フーセン」（東京・大妻高1年）▽岸本春花「鼻の奥で香る恋」（福島・会津学鳳高2年）

◎**入選**　武藤結衣「カケル」（埼玉・狭山ケ丘高2年）▽檍里佳子「そして、乙女の腹に乗る」（兵庫・長田高1年）▽大内侑美「赤いコオロギ」（三重・桑名高1年）▽森萌華「先生の笑顔」（三重・桑名高1年）▽乾迪保「ジャムとピアノとバイオリン」（岡山・津山工業高専2年）▽大野木一博「高速道路地蔵」（岡山・津山工業高専2年）▽野田真菜「自分の価値」（福岡・北筑高1年）▽宮澤栞菜「ラストノート」（埼玉・熊谷女子高3年）▽金雪芽「自由の鳥」（東京・東京電機大高1年）▽山本佳奈「惑う小瓶」（千葉・佐倉高2年）

現代詩の部

◎**佳作**　黒肱奈乃子「窓に、アオ、咲え！」（沖縄・N高沖縄伊計本校1年）▽有泉遥「日常のトランスフォーメーション」（埼玉・浦和第一女子高2年）▽薄衣唯華「淡々と」（神奈川・県立川崎高1年）▽瀬口愛奈「さいわい」（福岡・修猷館高3年）▽加藤優奈「骨と夢」（埼玉・鴻巣高3年）

◎**入選**　吉永博紀「淡色」（東京・淑徳巣鴨高1年）▽矢田安侑子「かくれんぼ」（神奈川・麻生高3年）▽野口真絢「鏡の中から正しき声が手を伸ばす」（東京・朋優学院高2年）▽鈴木僚介「僕と私で」（神奈川・県立川崎高1年）▽伊藤朋香「止まらない〝時間〟」（宮城・常盤木学園高2年）▽草加修宏「オルゴール」（岡山・津山工業高専1年）▽宮崎淳也「部屋」（佐賀・早稲田佐賀高2年）▽森中健人「献花」（兵庫・灘高1年）▽春日朋佳「夏の果て」（青森・八戸工業高専2年）

短歌の部

◎**佳作**　平嶋遥歌（熊本・熊本信愛女学院高3年）▽白沢貴悠（群馬・太田高1年）▽山邊愛恵（長崎・聖和女子学院高1年）▽大塚佑介（福岡・西日本短大附属高1年）▽川名遼（千葉・安房高3年）

◎**入選**　井手穂香（千葉・若松高2年）▽川北直果（東京・東星学園高2年）▽広瀬大輝（茨城・結城第二高4年）▽舩窪花純（福島・会津高3年）▽井嶋南里（奈良・畝傍高2年）▽宇貫真布（埼玉・浦和第一女子高2年）▽岩田凌央（埼玉・深谷商高1年）▽羽根田瑞希（宮城・常盤木学園高2年）▽松本愛里（長崎・大村高1年）▽平和陸斗（大阪・堺東高1年）

俳句の部

◎**佳作**　南條理沙（宮崎・宮崎西高3年）▽河原井愛美（茨城・水戸第二高1年）▽中野渡瑞希（青森・七戸高3年）▽木村詩音（茨城・結城第二高4年）▽小波蒼一朗（福岡・西日本短大附属高1年）

◎**入選**　林里美（茨城・下館第一高2年）▽長沢叶生（埼玉・浦和第一女子高1年）▽太田　慧南（埼玉・浦和第一女子高1年）▽原悠菜（愛知・幸田高2年）▽川村海斗（青森・七戸高1年）▽小林空（愛知・名古屋高2年）▽白井駿助（福島・会津高3年）▽大橋碧（茨城・結城第二高3年）▽竹下桃香（福岡・西日本短大附属高1年）▽松田れんげ（長崎・大村高2年）

【審査員（敬称略）】◎短篇小説の部▽中村航（作家）▽傳馬義澄（本学名誉教授）▽井上孝雄（都立高教諭）◎現代詩の部▽水無田気流（詩人・本学経済学部教授）◎短歌の部▽田中章義（歌人）◎俳句の部▽堀本裕樹（俳人）◇村田光英（高校生新聞社編集局長）

最優秀賞受賞者コメント

短篇小説の部　**野口創さん（福岡・筑紫丘高２年）**

「受賞するとは思わなかったので、とても驚きました。『遠き虹への反逆』というタイトルは、我ながら魅力的だったので、そこが評価されたことはとてもうれしいです」

現代詩の部　**藤井志穂さん（広島・舟入高２年）**

「家族の死をきっかけに考え、無心で書きました。自分の気持ちに向き合うことは難しかったですが、形にできてよかったです。今後も作品を作り続けます」

短歌の部　**永田海生さん（長崎・大村高３年）**

「受賞できるとは思っていなかったので驚いています。自分の思いをどう表現するか大変ですが、今後もたまに作って友達と楽しめたらいいなと思います」

俳句の部　**荒井洋太さん（群馬・太田高２年）**

「これまでの作風から脱却し、自分らしさを追求した作品の第一号で入賞できたことは本当にうれしいです。これからも研さんを続けていきます」

応募総数 1万6813点

国学院大学とスクールパートナーズ（高校生新聞）による第22回全国高校生創作コンテスト（協賛：国学院大学若木育成会・国学院大学院友会・国学院大学北海道短期大学部、後援：文部科学省・全国高等学校長協会・全国高等学校国語教育研究連合会・日本進路指導協会）と、第14回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト（協賛：国学院大学若木育成会・国学院大学院友会・国学院大学北海道短期大学部、後援：文部科学省・農林水産省・全国高等学校長協会・日本進路指導協会）の入賞作品が決定し、12月2日に渋谷キャンパスで両コンテストの表彰式が行われた。今回は両コンテスト合わせて1万6813点の応募があり大きな盛り上がりを見せた。

高校生向けコンテスト入賞者決定

第14回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト

折口信夫賞に砺波高（富山）

「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストは、各地域に伝わる昔話や伝説、郷土料理や方言などの身近で当たり前な風景にある「地域社会」に目を向け、文化を掘り起こして向き合うことによって現在の私たちにできることを考えてもらおうと開催。本学の持つ伝承文化に関する資産に触れることで、さらに研究を深めてもらうことも狙っている。平成17年から開催され、14回目となる今回は全国から728点の応募があった。内訳は、地域文化研究部門の団体36点・個人449点▽地域民話研究部門の団体36点・個人195点▽学校活動部門12点―だった。

最も優秀な作品に授与される折口信夫賞に地域文化研究部門（団体）最優秀賞の砺波高2年文系・歴史民俗班（富山）が選ばれたほか、各部門の最優秀賞、優秀賞、佳作、入選が**別表**（敬称略）のように決まった。

表彰式には入賞者と関係者、審査員、赤井益久学長、加藤圭子若木育成会会長、加藤元茂院友会常務理事、西健太郎高校生新聞編集長らが出席。表彰式の後、各部門最優秀賞の団体・個人の受賞者が、それぞれの研究内容を披露した。

研究内容を発表する砺波高校の生徒

折口信夫賞

「宮地集落の民俗誌」
（富山・砺波高２年文系・歴史民俗班）

地域文化研究部門

《団体》

最優秀賞 **「宮地集落の民俗誌」**
（富山・砺波高 ２年文系・歴史民俗班）

優秀賞 **「広めよう！みゃーくふっと先人の郷土文化」**
（沖縄・宮古総合実業高 生活福祉科）

「平成最後の〝祖父江の虫送り〟～杏和高校　繋がりを求めて～」
（愛知・杏和高 地域研究グループ）

《個人》

最優秀賞 **「漬物で語る ～『知らない』と『忘れる』に立ち向かう人々～」**
飯田真世（愛知・杏和高３年）

優秀賞 **「福井県敦賀市の伝統行事、『敦賀まつり』について」**
荒殿一花（東京・広尾学園高２年）

「変化していく音頭 ～音頭から始まる流行音楽のかたち～」
武井千夏（愛媛・済美平成中等教育学校４年）

地域民話研究部門

《団体》

優秀賞 **「おたちきさん ～なぜ、五百年以上祀られ続けてきたのか？～」**
（愛媛・西条高 地域・歴史研究部）

「民間に根付く妖狐妖狸伝」
（群馬・高崎商科大学附属高 社会部特選・特進男子）

「『あくねのなな不思議なおかし』～阿久根の七不思議を調べて～」
（鹿児島・鶴翔高 郷土芸能同好会）

《個人》

最優秀賞 **「『鬼』考～今昔物語集と民話における～」**
大和田一稀（東京・世田谷学園高２年）

優秀賞 **「河口湖天上山に伝わる『カチカチ山伝説』の真相～カチカチ山伝説の発祥地は本当に天上山なのか？～」**
廣瀬香奈（山梨・吉田高３年）

「澤様と人々の思い」
木村心優（愛知・杏和高２年）

学校活動部門

優秀賞 **「妖怪『地域興し』～山城の妖怪を活かした観光地づくり～」**
（徳島・池田高 探究科）

「白文鳥の町弥富を再び ～弥富文鳥文化復活を目指して～」
（愛知・佐屋高 文鳥プロジェクト）

地域文化研究部門（団体）

◎**佳作** 「２０２０東京大会に向けて全国・全世界に発信したい三島―沼津間６・６㎞の道」（静岡・沼津城北高 情報メディア部）▽「自分たちの足元をみつめる～我が家のお雑煮から〝今〟を考える～」（愛知・杏和高 旧２年３組お雑煮調べ隊）

◎**入選** 「ふるさとの宝物探し」（岐阜・益田清風高 地域研究）▽「伊勢神宮にまつわることについて」（東京・香蘭女学校高等科 伊勢研修）

地域文化研究部門（個人）

◎**佳作** 「関西弁は日本語習得の良いツールとなりえるのか～外国人の第二外国語習得からみた関西弁～」弓場鈴響（東京・渋谷教育学園渋谷高２年）▽「報恩の民『台湾少年工』は日本統治時代における犠牲者でしかないのか」矢川優里（神奈川・横浜国際高３年）

◎**入選** 「蜂須賀家政の墓を探る」江川美結（徳島・徳島文理高２年）▽「屋久島の郷土料理を伝えるよりよい方法を探る」福元美那（鹿児島・屋久島高３年）▽「伝承されていく津軽三味線」古川弥音（青森・五所川原第一高１年）▽「海童神社について」北畠來夏（青森・五所川原第一高１年）▽「一本タモ」工藤千愛（青森・五所川原第一高１年）

地域民話研究部門（団体）

◎**佳作** 「高尾山の天狗伝説」（高尾研究会〔東京・共立女子第二高、神奈川・桐蔭学園高〕）▽「衛門三郎伝説」（愛媛・東温高 郷土芸能部）

◎**入選** ▽「佐野の伝承についての調査及び英訳活動」（栃木・佐野高 佐野地域伝承研究班）▽「岩木山と鬼神伝説」（青森・五所川原第一高２年６組Ｇチーム）

地域民話研究部門（個人）

◎**佳作** 「六合物語～これを語りて柳田國男を戦慄せしめよ～」小杉恒太（群馬・高崎経済大学附属高３年）▽「箱根における九頭龍伝説」石田瑠奈（神奈川・鎌倉女子大高等部２年）

◎**入選** ▽「伊能忠敬の腰掛け石伝承について」谷口生貴斗（福岡・修猷館高２年）▽「七夕のはじまり」今井真琴（青森・五所川原第一高２年）

【審査員（敬称略）】 ▽小川直之（本学文学部教授）▽新谷尚紀（同）▽花部英雄（同）▽高橋大助（同）▽常光徹（国立歴史民俗博物館名誉教授）▽佐藤美穂（本学客員教授）▽飯倉義之（本学文学部准教授）

最優秀賞受賞者コメント

地域文化研究部門：団体・折口信夫賞

富山・砺波高 ２年文系・歴史民俗班（代表：水上亮輔さん）

「高校で初の試みとなった能登実習の活動記録をまとめました。賞をいただけたことに驚くとともに、能登の方々に感謝しなければと思いました」

地域文化研究部門：個人

飯田真世さん（愛知・杏和高３年）

「昨年は優秀賞で悔しい思いをしたため、『今年こそ！』の気持ちが実りました。努力に結果がついて本当にうれしいと実感しました」

地域民話研究部門：個人

大和田一稀さん（東京・世田谷学園高２年）

「母親がコンテストをインターネットで探してくれたので、一歩踏み出して論文を書いてみることにしました。夏休みをまるごと使って論文を書いてよかった」

高校生向けコンテスト『入賞作品集』を制作中

今回のコンテスト入賞作品を掲載した「全国高校生創作コンテスト入賞作品集」、「『地域の伝承文化に学ぶ』コンテスト入賞作品集」を２月下旬に刊行の予定です。同作品集は、無料配布いたします。発送をご希望の場合は、希望部数と送付先をご連絡ください。

問 総合企画部広報課（☎03・5466・0130）

２つの高校生向けコンテストの詳報は、学報２月号に掲載します

インフォダイジェスト

…在学生　…保護者　…卒業生　…一般　…受験生
内内容　日日にち　時時間　場場所　対対象　申申し込み　料料金　問問い合わせ

大学からのお知らせ

国学院大学修学支援奨学金（前期採用）を募集

内支給金額30万円（２分割給費）
対現１～３年の学部学生で、勉学意欲があり、経済的事由により修学困難な学業・人物とも優秀な者
申来年１月31日(木)までに願書・要項を事務局窓口で受け取り、３月18日(月)・19日(火)の受付時間内に文・経済・法・神道文化学部生は学生生活課、人間開発学部生はたまプラーザ事務課へ出願。詳細は要項で確認を。
問▶学生生活課
（☎03・5466・0146）
▶たまプラーザ事務課
（☎045・904・7705）

大学入試に伴う入校制限

平成31年度大学入試センター試験および本学一般入試実施のため、会場となるキャンパスへの入校を**下表**の通りに制限します。なお、該当期間は課外活動を行うことができません。また、来年１月19日(土)は全日休講となります。

イベント30

チャレンジ！器械運動

内お子さんは、器械運動は得意ですか？　運動遊びはしていますか？　器械運動の苦手なお子さんは、運動遊びの経験が不足しているかもしれません。モスクワ五輪体操競技代表の笹田弥生准教授（人間開発学部）が、リズム体操、からだつくり・ほぐしの運動、サーキット運動、マット、とび箱、鉄棒について指導します。
日来年２月16日(土)
時10時30分～11時45分
場たまプラーザキャンパス・アリーナ
料500円（「親子で楽しむ運動遊び」受講者は不要）
対５歳～小学４年生（先着25人）
※保護者から離れて講習が受けられるお子さま
申１月16日(水)10時からＨＰの申し込みフォーム（https://www.kokugakuin.ac.jp/event/93049）で受け付ける。FAX（FAX045・904・7707）の場合は、講座名・申込者とお子様の氏名（ふりがな）・参加人数・年齢・性別・住所・電話番号・メールアドレスを記入して申し込み
問地域ヘルスプロモーションセンター（☎045・904・7707、平日10時～17時、土曜９時～13時）

博物館

料無料
時10時～18時（入館は17時30分まで）、12月26日(水)～来年１月６日(日)、15日(火)～21日(月)は休館

特別展「神に捧げた刀ー神と刀の二千年ー」

内神のはたらきを表したり、神への重要な捧げ物と位置づけられてきた刀剣。本展では、東国各社の奉納刀を展示、神や神社と刀剣の関係について、その歴史的背景を明らかにします。
日来年１月22日(火)～３月16日(土)
場博物館企画展示室

ミュージアムトーク

場博物館ホール
▶「刀の神と神の刀」
内当館の笹生衛館長が講演します。
日１月26日(土)
時14時～15時
▶「中世東国武士の神社信仰と刀剣」
内当館の笹生衛館長と吉永博彰助教が講演します。
日２月９日(土)
時15時30分～16時30分
▶「神に捧げた刀」
内ふくやま美術館長で東京芸術大学名誉教授の原田一敏氏が講演します。
日２月23日(土)
時14時～15時
▶「愛しき刀ーその歴史と扱いー」
内当館の内川隆志副館長と刀剣研究家の黒沢義文氏が講演します。
日３月２日(土)
時15時～16時

特集展示「那智参詣曼荼羅巻子本の仕立てを探るー東京文化財研究所による光科学的調査の成果報告ー」

内国学院大学図書館が所蔵する本資料は、多数の類本が存在する那智参詣曼荼羅のなかでは珍しい「巻子本」の形をとるものです。本展では、東京文化財研究所による最新の光学的調査によって明らかになった「掛幅」から「巻子本」への調整過程を公開します。
日来年１月14日(祝)まで
場博物館ホール

※博物館関連イベントの問い合わせは☎03・5466・0359

ＬＬＣ

ＴＯＥＩＣ® 学内テスト

内ＬＬＣが団体受験特別制度（ＩＰ:Institutional Program）として実施するものです。公開テストとＩＰテストのスコアの有効性はTOEIC主催団体で同一とされていますが、一部の企業、公務員採用試験、大学院入試などによっては公開テストの結果の提出を求められる場合もあります。
日来年２月14日(木)
時10時15分集合、13時解散（試験時間は２時間）
場渋谷キャンパス（教室は未定）
料3500円
対本学在学生
申１月30日正午までに自動証紙発行機で証紙を購入し、各キャンパスのＬＬＣに提出
問▶渋谷：ＬＬＣ（百周年記念館）
▶たまプラーザ：ＬＬＣ　ＹＯＫＯＨＡＭＡ　ＯＦＦＩＣＥ（１号館）

◆大学入試センター試験

渋谷キャンパス　※図書館は、１月18日：９時～22時、１月19日、20日：10時～18時で開館

日	時	立入制限区域等
１月18日(金) 入学試験準備日	17時以降	若木会館、百周年記念館（地下２階、４階）
	19時30分以降	120周年記念１号館
	21時以降	120周年記念２号館、３号館、130周年記念５号館
１月19日(土)･20日(日) 入学試験当日	終日	120周年記念１・２号館、３号館、130周年記念５号館、若木会館、百周年記念館（地下１・２階、３・４階）

※１月18日17時～20日：国際交流センターと院友会館の通用門は封鎖

◆本学一般入試

渋谷キャンパス　※博物館は２月２日、３日のみ休館

	日	時	立入制限区域等
A日程	２月１日(金) 入学試験準備日	終日	120周年記念１・２号館、３号館、130周年記念５号館、百周年記念館（地下１階、３階）
		15時以降	若木会館、百周年記念館（地下２階、４階）
		19時30分以降	学術メディアセンター
	２月２日(土)～４日(月) 入学試験当日	終日	120周年記念１・２号館、３号館、130周年記念５号館、学術メディアセンター（博物館を除く）、若木会館、百周年記念館（地下１・２階、３・４階） ※若木タワー（２月２日(土)のみ立入制限とする）
B日程	２月23日(土) 入学試験準備日	終日	120周年記念１・２号館、３号館、130周年記念５号館、百周年記念館（地下１階・３階）
		13時以降	若木会館、百周年記念館（地下１・２階、３・４階）
		19時30分以降	学術メディアセンター
	２月25日(月) 入学試験当日	終日	120周年記念１・２号館、３号館、130周年記念５号館、学術メディアセンター（博物館除く）、若木会館、百周年記念館（地下１・２階、３・４階）

※２月１日17時～４日、23日17時～25日：国際交流センターと院友会館の通用門は封鎖

たまプラーザキャンパス

	日	時	立入制限区域等
A日程	２月１日(金) 入学試験準備日	終日	１・２・３・５号館、体育館、若木21
	２月２日(土)・３日(日) 入学試験当日		

本学の機関紙を定期購読してみませんか？

「国学院大学学報」は、本学のニュースや学生・院友（卒業生）・教職員の活躍をお届けする機関紙（年11回発行、８月は休刊）です。定期購読をご希望の方は、広報課までは がき、ＦＡＸ、メールでご連絡ください（年間購読料：５００円〈税込み・送料含む〉）。連絡先は、１面参照。

教員が学生から学ぶこと

若木が丘だより

経済学部准教授
中田 有祐

平成25年に国学院大学に着任してから今年で６年目となります。思い返すと、最初は授業も下手で、アクティブ・ラーニングの「ア」の字もないような授業を行ってしまい、学生に迷惑をかけたように思います。そこで、特にゼミなどは、プライドを捨てて学生に率直なフィードバックを求め、それをもとに授業の内容や実施方法を修正していきました。もちろん、定期的に開催されるファカルティ・デベロップメント（ＦＤ）に参加し、そこで学んだ経験も生かされているものと思いますが、学生からのこれらの生のアドバイスが、現在の授業スキルに大いに役立っているように感じます。今も、授業運営では失敗も多く、反省することばかりです。ただ、その都度、初心を忘れず、学生からのフィードバックをもらうようにしています。

さらには、研究においても、学生からの意外な質問や意見が良い方向に反映される場面もありました。私の研究領域は会計学ですが、当初は、研究と教育に相互作用があるという認識は薄く、研究が教育に反映されることはあれども、一定程度、大学教員は研究と教育という別個の職務を行うものである、と思っていた記憶があります。ところが、一昨年、学生から「企業の財務データで、欲しい情報が取れず分析が進まない箇所がある」との意見を受けたことがきっかけで、その周辺領域に着目して新たな研究に着手しました。そこでのアイデアを具体化して、最終的には学会発表を行っています。

教員は、学生にさまざまな気づきを与える職業ではありますが、学生からも、さまざまな気づきを与えられる職業です。このことを忘れず、新たな気づきとの出合いを楽しみに、今後も教育・研究に勤しんでいきたいと思います。

ラグビーフットボール部

関東大学ラグビー2部 ３連続トライも一歩及ばず３位

関東大学ラグビー・リーグ戦グループ2部は全日程（９月16日～11月18日）を終了し、ラグビーフットボール部は５勝２敗、勝ち点22で３位に終わった。開幕から５勝１敗と好調の同部は11月18日、拓殖大学グラウンドでの最終戦に臨んだ。対戦相手は、勝ち点で並ぶ東洋大学。勝てば１部との入れ替え戦進出が決まる。

前半を６－７で折り返し、迎えた後半、立ち上がりに立て続けにトライを奪われ一時は15点差までリードを広げられた。

追いかける同部は、ＷＴＢの藤田爽太郎選手（健体４）のトライで試合の流れを引き寄せると、江上雄代朗選手（法３）、桑原真諭選手（健体２）が立て続けにトライを挙げ、25-21と逆転に成功した。

しかし、終盤に東洋大学に再び逆転を許し、25-35でノーサイド。関東学院大学、東洋大学に次ぐ３位でリーグ戦を終えた。

K SPIRITS

国学院大学全学応援団連続インタビュー〈中〉
チアリーダー部ＢＵＮＮＹＳ

いつでも笑顔を。私たちは応援するチア

「応援の華」とも称されるチアリーダー。国学院大学全学応援団では、チアリーダー部ＢＵＮＮＹＳが華麗で迫力ある演技を披露する。学内外のイベントでも活躍するが、その歴史はブラスバンド部とともにわずか４年と思いのほか短い。

創設について、全学応援団広報室長の安田一貴さん（法４）は「リーダー部のみの応援に限界を感じ、ブラスバンドとチアを加え応援の幅を広げることになりました」と話す。４年目で17人にまで増えたチームは、チアリーダー部長の宮澤碧（あおい）さん（法４）、副団長の髙橋花実さん（法４）、幹部の仲田菜摘さん（子支４）の３人が１期生として引っ張ってきた。

「コーチの指導以外に動画サイトも先生でした。１年春の野球シーズンでは応援できず、秋の神宮でデビューできました」

期待を胸に応援に臨んだ３人を待ち受けていたのは「君たち誰？」という視線。「見慣れぬチアが出てきたんですから不審に思いますよね。でも、シーズンを終える頃には、『頑張って！』『応援ありがとう』との言葉ももらえ、チアの楽しさが増してきました」と振り返る。

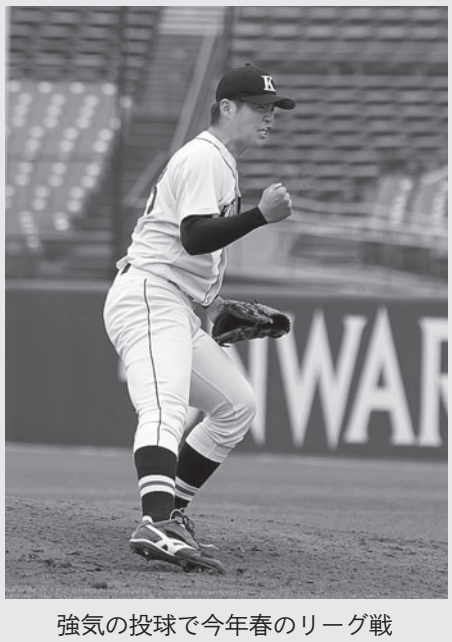
ゼロから作り上げたＢＵＮＮＹＳの演技は、リーダー公開などのチア・ステージを含めると「ほぼ無数」（宮澤さん）という。そんな演技で一番求められるものは「信頼」。プライベートでもめ事があっても、「練習や本番ではしっかり切り替えます」。宮澤さんの口調には揺るぎがない。

もう一つ、「笑顔」も忘れてはならない。「どんな時でも『負の感情』を顔に出してはダメ。私たちは応援を第一としたチアですから」と言い切る宮澤さん。週２回の練習では鏡に向かって演技に磨きを掛けるのと同時に、笑顔のチェックも大事な要素だという。

チア経験は就活にも生きた。「面接でお話しさせてもらったのは、チアのことばかり。面接官にも興味を持ってもらえました」。銀行の一般職として働くことが決まっており、「窓口で『いつでも笑顔』が生かせます」と笑みを浮かべる。

練習中の後輩からは「新歓の時、スッと立っている先輩がたの姿に感動したのが入団の決め手でした」との声も。チアにかけた宮澤さんたちの「想い」は、確実に受け継がれている。

Ⅰ面から



強気の投球で今年春のリーグ戦では最優秀防御率を獲得

―― プロ野球選手を目指したのはいつから

帝京高校２年のときに、１学年上でバッテリーを組んでいた石川亮捕手（現・日本ハム）がプロに行ったのが大きかったかなと思います。３年でプロに行きたいと思っていたのですが、周りの選手を見たときに、やっぱり自分にはまだ足りないものが多いなと思い大学進学を選びました。

国学院大学に進学して、１年のときに柴田竜拓選手（現・横浜DeNA）がプロに進みましたし、東都大学野球で戦うたくさんの選手がプロに行くのを見て「行きたい」が「行く」に変わってきました。３年のときには「絶対に行く」という気持ちを持っていたのが、大きかったですね。環境が意識を変えてくれたと思います。

―― 大学での４年間を振り返って

授業から帰ってきても誰かが合宿所の玄関でバットを振っていたり、ウェイトトレーニングをしていたり。食堂に行ったら体重の少ない人が人より多くご飯を食べていたりしている。どこかで誰かが野球をしているので、あの環境にいたら野球から離れようという感覚にはなれないです。

野球に対して「うまくなりたい欲」というのは、誰もが持っています。メンバー外だからこそレギュラーよりも練習していつかチャンスをもらったときに結果を出そうという仲間がゴロゴロいる野球に集中できる環境でした。

今季もそうだったのですが、東都大学野球１部は優勝争いをしていたのにも関わらず、１つの試合を落としたことによって５位、４位になることもあります。実力が拮抗しているゆえに、いい経験になりました。

―― いよいよプロ野球の世界に入る。17番を背負って、目指すピッチャー像は

ヤクルトで背番号17は、通算191勝を挙げた松岡弘さん、沢村賞や最多勝を獲得した川崎憲次郎さんが付けたエースナンバーです。子どもたちが「17番をつけたい」「清水みたいになりたい」と思ってもらえるような選手になりたいです。

K:DNA

2018 12

K:DNA――創立136年目を迎えた国学院大学の遺伝子…個人・個性を尊重する校風　若いエネルギーが未来を変える

速報

陸上競技部

箱根駅伝　エントリー選手発表
シード奪還へ「歴史を変える挑戦」

壮行会でエールを送られる選手たち

来年１月２、３日に開催される第95回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）に出場する全23チームのエントリー選手16人が12月10日に発表された。３年連続12回目の本大会出場となる本学陸上競技部は、土方英和主将（健体３）を中心に88回大会以来のシード権獲得を目指す。

11日に渋谷キャンパスで行われた壮行会では、赤井益久学長から土方主将に「箱根路の風になって駆け抜けろ」というエールとともに赤紫のたすきが手渡された。

土方主将は「チーム目標は８位、シード権獲得。必ず達成したい」、前田康弘監督は「全日本大学駅伝では６位でシード権を獲得しチームが充実してきている。ここからが勝負。心に残る走りを披露したい」と意気込みを語った。

エントリー選手顔写真および名簿（氏名・所属・抱負）

江島　崚太（経４）
最終学年の意地とプライドで止まっていた歴史を大きく動かしたい

蜂屋　瑛拡（法４）
過去の国学院を超える結果を求める

土方　英和（主将・健体３）
箱根駅伝は、目標の原点。持ち味の安定感で結果を残したい

田川　良昌（経２）
夢の舞台で自分に与えられた役割を全うする

小中　駿祐（経４）
最初で最後の箱根駅伝。自分の力をすべて出す

青木　祐人（経ネ３）
持てる力を出し切り、シード権獲得。個人では区間賞を目指す

茂原　大悟（史３）
自分の力を発揮し、シード権獲得に貢献できる走りをしたい

森　　秀翔（史２）
区間１桁順位で、歴史を変える挑戦に貢献

芹澤　昭紀（経ネ４）
憧れの舞台が今は戦う場所。感謝の気持ちを走りに込める

浦野　雄平（経営３）
世界大会などで成長したことを走りで示す。個人目標は区間賞

臼井　健太（健体２）
歴史を変える一員として一年間やってきたことを出し切る

殿地　琢朗（健体１）
高校で都大路を走れず悔いが残った。一生心に残るのが箱根。必ず結果を残す

長谷　勇汰（史４）
陸上人生のきっかけとなった憧れの舞台。恩返しの走りで10年間の集大成に

田中　義己（経３）
箱根駅伝は中学生からの夢。復路で崩れない粘りの走りを

木下　　巧（健体２）
お世話になった人に恩返しをする舞台。自分のやってきたことを証明する

藤木　宏太（神文１）
今年一年の集大成。自分の役割を最大限果たしたい

硬式野球部

プロ野球・東京ヤクルト　１位指名
清水投手「環境が意識を変えたプロへの道」

仮契約を終え、こくぴょんとつば九郎を手にする清水昇投手（日刊スポーツ新聞社提供）

10月に行われたプロ野球・ドラフト会議で、東京ヤクルトスワローズから１位指名された清水昇投手（日文４）。12月７日には、入団選手発表会が都内で行われ、背番号17のユニフォーム姿を披露した。「戦国東都」と呼ばれる東都大学野球１部で43試合に登板し、13勝を挙げた右腕は、４年間の学生生活に何を思い、まもなく始まるプロ生活に何を目指すのか。

ドラフト1位に高揚感とプレッシャー

―― ドラフト指名から１カ月余りが経った今の心境は

ドラフト指名を受けたときは、今までやってきたことがありますから、気持ちが高ぶりました。仮契約が終わって、これから結果を出していかないといけないプレッシャーが出てきました。これは、自分の中で前向きな意欲に変えられたらと思っています。

Ⅱ面へ続く

博物館 No.18
学芸員の資料ファイル

今月の資料　**蔵骨器**

時　代：平安時代（前期）・９世紀
出土地：茨城県つくば市東岡
金田官衙遺跡（九重東岡廃寺）

桜川西岸の台地上に所在する金田官衙遺跡は、奈良時代前葉から平安時代前葉にかけて営まれた常陸国河内郡の郡衙・郡寺関連遺跡です。本資料は、九重東岡廃寺と呼ばれる郡寺推定地から出土した一対の広口壺であり、蔵骨器として組合式の石室に埋納されていました。頭部の櫛書波状文や、胴部に巡らせた突帯、肩部から胴部にかけての蓮弁文などは、国内に例を見ない意匠であり、朝鮮半島からもたらされたものである可能性が高いと考えられています。

展示案内：本資料は、博物館の常設展示（考古展示室）でご覧いただけます。
ウェブサイト案内：
http://museum.kokugakuin.ac.jp/